

本日はお忙しい中、保護者会に足をお運びいただき、誠にありがとうございます。

お陰様でGNOBLE開校から1年あまり経過いたしました。先月(9月)から新宿本部6階の教室利用が可能になり、ようやく自習室を常設できることになりました。(6階使用にあたってはビルのオーナーさんに無理をお願いしトイレ増設工事も行いました。)まだまだ至らぬ点多々ありますが、今後もお子様たちの学習環境を整えて行くべく取り組んでまいりますので、少し長い目で応援していただければ幸いです。

◆ご父母アンケートの結果を見て

さて、初めての卒業生が巣立ちしばらくたった6月、その一期生のご父母を対象にアンケート調査を行いました。お父様、お母様がどのようにサポートをされたかをお聞かせいただき、今後の参考にしたいとの思いからでした。アンケート結果の一部を冊子末に掲載いたしましたのでご覧ください。

予想していたとおり、中学受験、高校受験とは異なり、大学受験においては、保護者の方は一步引いた立場からお子様を見守っておられるようでした。生徒たちの人生における大きな岐路である大学受験ですが、その一大事を生徒たちは自分で選択し、自分で乗り越えていました。中学・高校期は、生徒たちにとっては『自我の確立・自立の準備』の時期にあたりますが、勉強の面でも、まるで親の背丈を追い越していくように、その内面を成長させ、自主性を身に付けて大学受験を迎えている姿がアンケート結果から窺えました。

受験指導をしている私たちの実感としても、大学受験をする生徒に求められるのは自ら勉強に向かう姿勢です。「やらされている勉強」ではどこかに歪みが生じ、早々に限界を迎えたり、道から逸れることになったりという結果になりがちです。また、過保護なご家庭のお子様は、困難に自ら立ち向かう気概のないひ弱な受験生になっていくおそれもあります。保護者の方には、お子様から少し距離を置いてお力添えいただくことを私たちは望んでおります。すべてが順調に進んでいくことよりも、ときには多少の失敗を通して学べることも多いのだ、という姿勢が大人には必要なのではないのでしょうか。成績が伸び悩んだり、勉強に向かう気持が失せたりするところから、あるいはそういう状態に直面して悩むところから、生徒たちは多くのことを学び成長していきます。

また、勉強は知識をただ効率よく覚えればすむものではありません。作業をただ多くこなすことに意義があるわけでもありません。一流大学に受かるためには手段を問わないという態度も、受験では勝利を収めることがあっても、結局は子供たちの人生をスポイルしかねません。個人の持つ力が学歴以上に評価される時代だからこそ、生徒たちを見守る大人の接し方は大切だと私たちは考えています。

◆お母様が付き添う時期

子供たちの「知」の発達について、また、大人がどういう態度で接すればいいかについて、私たちに次のように考えています。

幼いころの子供たちはファンタジーの中に暮らしていますが、やがて、身体も内側も成長していくと「知」の世界に足を踏み入れていきます。ときに、それはエポックメイキングな‘事件’になることもあります。

アインシュタインは、買ってもらった方位磁石がいつも同じ方向を向いていることに強烈な興味を覚え、それがきっかけとなって知の世界へと進んでいったという話をご存知の方も多いでしょう。あるお子さんは、はじめて望遠鏡で星を覗いたとき、「お母さん、星が丸い！」とあわてふためいたそうです。火星や木星などの惑星は、望遠鏡でかなりはっきりその姿を見ることができますが、その姿は丸く、決して☆形ではありません。星は☆形だと思っていた子供にとっては驚愕の瞬間です。

多分、皆さんのお子さんにもこのような時期がかつて訪れたはずです。知的な好奇心が芽生え、知的に考える準備が整ってきた子供の姿は微笑ましく、将来が楽しみに思えます。多くの場合、この時期から中学受験の頃までは、親御さんが大きく関与されていく時期です。年齢に合わせた知識を授け、考え方を徐々に教えていくことで、子供たちもどんどん成長を遂げていきます。大人の責任で、ときに褒め、ときにしかるといった引っぱり方で子供は成長していきます。塾の選択にも大いに親が関わることになります。冊子末のアンケート結果には掲載しませんでした。が、中学受験の塾選びにおいては、9割方お母様がお決めになっていました。

語弊はあるでしょうか、中学受験までのこの時期を「親子の蜜月時代」と言っていいかもできません。（「蜜」ではなく親子関係が「密」です。）お母様がお子さんの知的な面での成長に大きな責任を担われ、そのご苦勞は大変だと思いますが、積極的に関わることで喜びもお感じになられたのではないのでしょうか。

しかし、中学に入ると、徐々に親離れ・子離れの時期を迎えなくてははいけません。問題は、どういう形で迎えるかです。

◆生徒たちの成長を阻まぬように

中高生の受験指導をしてきた中で、私たちは、ふたつの典型的な、問題のあるパターンを目にしています。

ひとつは「即刻大人扱い型」、もう一つは「自立阻止型」です。

前者は、「中学生になったのだから自分の責任でやりなさい」とお子さんからすぐに距離を置いてしまう接し方です。自主性を重んじているように見えながら、実は責任を放棄している点が気になります。これまでの中学受験の疲れがお母様に出てきているのかもしれない。中学受験時に、保護者が積極的に関わっていたご家庭では特に、「これからは自分でやりなさい」と急に言われても、お子さんはとまどってしまうでしょう。中学生の段階ではまだ自己コントロールができないのが普通です。放っておくと、中学の時期に身に付けたい、場合によっては中学時代でなくては手遅れになる知識や考え方が大きく抜けてしまいます。恐ろしいことに、大半の学校でもフォローしてくれないのが現状のようです。「生徒の自主性を重んず

る」、「詰め込みは行わない」などの、それ自体は立派な主義のもとに、これからの人生に大切な基礎力が培われていない例を私たちは多数見てきています。

後者の「自立阻止型」は、お母様が先回りしてあらゆることを手配されている場合です。子供たちは勉強も身の回りのことも、お母様の下でしっかりやっていますから、学年がそれほど上でないときには「成績のいい子」です。しかし、お膳立てされた「作業」をこなしてきた生徒たちの知識は、多くの場合役に立たなくなっていくます。やってきたことを覚えてはいるのですが、その知識と知識を組み合わせる、知識を編集し応用する、という段になると途端に頭が止まってしまいます。上の学年に進むにつれて、大量の知識を扱うようになりますが、知識を納得し整理する習慣の身につけていない生徒には、もはや新しいことがらを覚えていくことさえもできなくなっていくます。興味を持って勉強をしてきたわけではないので、どの科目もぱっとせず光る科目がありません。やがて、真面目には取り組んでいるのに成績が伸び悩むという壁に当たることとなります。

◆塾の役割

中学・高校期は、高等教育を受けるための基礎を養い、『自我の確立・自立の準備』をしていく時期です。生徒たちは学校生活や部活をはじめ、勉強においても力いっぱい取り組み、多くの成功と失敗の体験を積み重ね、自分の能力や適性などに気づき、自分を鍛えていきます。この時期に大切なのは「環境・場の雰囲気」です。

私たちのような塾に求められているのは、自然に勉強に向かえる雰囲気を提供することだと考えています。将来にまで続いていく勉強(学問)において基礎はとても大切ですが、その基礎力は、生徒たちが好奇心を持って取り組み、「こういうことか！」と納得して、頭の中に整理し築いていくものです。理解が伴い蓄積された知識・ものの考え方は、大学受験でも大いに力を発揮し、大学入学後にさらに高度な知の礎になり、いずれ独創性になって花開いていく可能性を持ちます。

塾の教師は、クラス全体の進路や速度をコントロールしながら、一人ひとりにも目を向けていきます。成長が実感できるカリキュラムを用意し、解くことや考えることに夢中になれる良問を用意します。宿題をやってくること、授業中には真剣に取り組むことが当たり前、という雰囲気作りもしていきます。こういう環境の中、信頼できる教師および教材から学ぶだけでなく、同年齢の仲間からも刺激を受ける効果は大きなものです。

◆ご家庭の空気

ご家庭にあっても、知的な雰囲気が大切なのではないのでしょうか。お子さん本人と知的なことを直接会話するというよりも、上のご兄弟がいらっしゃる場合にはその方達との会話、夫婦の間で交わされている話題、何気なく本棚にならんでいる書籍類などの‘空気’を子供たちは吸って大きくなります。最近新聞紙面で、東大院生が「ドストエフスキーって誰ですか」と尋ねたことが話題になっていましたが、あるご家庭ではこんなことがあったそうです。お母様が高1の娘さんに、新訳の出た古典を買い物リストに書いておいてと頼んだそうです。その娘さんは「ドスト・F・スキー、カラマー族の兄弟」とメモしたということです。ひょっとして、ご家庭にドストエフスキーの書物が昔から並んでいたならこういう笑い話は生まれなかったかもしれ

ません。幼いころからお子さんは何となくドストエフスキーという不思議な名前を目にするでしょう。ある日手にとり「自分の読むものじゃない」と書棚に戻し、でも、やがて一定の年齢になったときに読み出すかもしれません。ご家庭の‘空気’を子供たちは吸っているのですから、その影響を大きく受けて子供たちは成長していくのではないのでしょうか。

お子さんにとって「安心できる安定した環境」も望ましいものです。子供たちは幼いころから、「安全基地」である保護者の存在をそれとなく感じられるときには、思い切って新しいことに挑み、存分に力を発揮します。私たちの経験上、大学受験生も事情は同じです。親御さんのことをいろいろ批判したりうるさがったりする年齢ですが、安定した暖かいご家庭であるほうが、生徒たちは受験勉強に安心して邁進し、実力をうまく伸ばせるようです。

◆大学の求める学生

さて、グローバル化が急な現代では、どの大学も国際競争力を高めるため高度な「知」を扱える人材を求めています。単にたくさんの知識を蓄えているのではなく、その知識を自在に使いこなせ、考えを深め、独創性を発揮する学生が求められています。高度なことを学ぶためには、まずは相手の話を正しく理解できなくてはなりません。そのために必要になるのは幅広い知識、論理力、曲解しないバランスのとれた精神などです。また、日本語であれ英語であれ(何語であれ)、自分の考えていることを正確に伝えられる表現力も重要です。そして何より、知的好奇心にあふれ、知的思考が大好きである必要があります。今の世の中では、他者の気持を感じ取り、思いやることのできる感性も大切でしょう。

ところが、東京大学出身でその後ケンブリッジで研究した脳科学者の本の中に、「東大生は大学入学後に活躍しなくなる」といったことが書かれていました。「東大生の多くは東大に入ることが目標なので、目標を達成したら勉強の動機を失う」というのでした。事実なら、とても残念なことです。

◆生徒たちが生き生きと大学に進むために

私たちGNOBLE職員は、中学生、高校生である生徒たちの健やかな成長に、勉強の面で携わっていきたいと考えております。生徒たちが力強く大学受験を乗り越え、その先の夢に向かって行ける土台作りに関わっていきたいと決意しています。明日につながる知識、考え方、学び方を指導し、学ぶ意欲をますます強く持って大学進学できるよう心掛けてまいります。

またその一方で、生徒たちが見事に行きたい大学への進学を決めたときには、「自分の力で難関を乗り越えた！」との自信が持てる、主体的な受験をしてほしいと考えています。合格請負人である私たち塾教師も、保護者の方も、生徒たちが目標をかなえ意欲を持って大学に進む手伝いができるよう、理性的に接していくことが大切なのではないでしょうか。